

# 私の幼児教育論 Ⅻ

神 沢 良 輔

## 三 保育の基本 (十)

——幼児とのかかわり合いの中で——

(四) 幼児のひとつひとつの行動には、それぞれ意味があることを理解する

(1)

ひとりひとりの幼児は、ひとりひとりがそれぞれ異なった要求をもって行動している。しかし、それらの行動のすべてが、必ずしも保育者によって受容されているというようにはいかないだろうし、案外にみのがされたり、無視されたりしていることも多いのではなからうか。また、時には拒否されたりする場合もある。けれども、それらはいずれも、ひとりひとりの幼児にとって、きわめて重要な意味がある。だから保育者が、そのようなひとりひとりの幼児の、ひとつひとつの行動のもっている意味を

理解していくことは、保育にとってもっとも基本的な課題であるということがいえよう。

そのためには、ひとりひとりの幼児との人間関係に入っていくというところで、ひとりひとりの幼児のもっている内部の世界について十分に理解するということによって、この問題に迫っていくという必要があるだろうし、また、その幼児をとりまくいろいろな環境的な条件についても、十分な理解をもつことがたいせつである。

しかも、幼児の要求は、きわめて瞬間的であり、保育者がそれを見落とすと、もうそれが何であつたかわからないということも多し、また、それは、ひとりひとりの幼児の発達ともからみあっているということがいえよう。といつても、ひとりひとりの幼児ひとつひとつの行動のもっている意味ということもさることながら、保育者にとっては、ひとりの幼児が保育者に理解できにくい行動や気にかかる行動をとったときに、それについてどのように

すればよいかということで、実際的には苦慮することの方が多くではなからうか。

(2)

このようなことは、保育経験の浅い保育者にきわめて多い。これは、それらの保育者のすべてがそうであるということではないであろうが、経験の浅い保育者にとっては、担任した幼児たちの発達の見通しがよくわからないという不安がある。そのため、あせりがちになり幼児の発達の水準以上のことを幼児たちに要求したりする。その結果として、幼児によっては興味や関心をなくしてしまふということにもなりかねない。また当然のことながら、幼児のとりくむ活動についての経験や内容の量の不足ということのため、幼児たちを満足させられないということも一つの原因であらう。

たとえば、学級全体の活動で、まるくなつて坐つて歌やリズムを保育者がしようとする、二、三人の幼児がその円のまんなかにてきて寝ころんでしまつて、他の幼児の活動を妨害したりするというような姿をみかけることがある。

保育者が、「みんなの邪魔になるから、自分の場所へもどつてください」などとことをかけると、返事もせずに保育者をうら

めしそうにらんで、動こうとしないばかりか、逆に、大の字になつて反抗的な行動をとったりする。

そこで保育者が、しかたなく出ていって手をもつてひっぱると、もとえはかえらないと抵抗するが、保育者がしてくれたというところで、ひっぱられながらもどつていくようである。そこで、保育者が、リズムなどを再開すると、保育者をみながらまた前のように円のまんなかへ、いたずらっぽくでてきて坐りこんでしまふ。

そして、このようなことをくり返しているうちに、保育者の方も、しだいに情緒が不安定になり、「なんどいったらわかるの。こんどしたら、お部屋をでていってもらいますよ」などと語気もしだいに荒くなり始める。でも、それくらいでは聞くことを聞いてくれない。なんとかして、保育者を困らせようと懸命であるようにも思われる。

このように、保育者とのかわり合いが、円の中にいる幼児に集中してくると、他の幼児たちも、だまつてみていられなくなり、保育者が円の中にいる幼児をもとへもどそうとする合い間をみて、保育者のいないピアノに近づき、鍵盤を両手でおさえて、とんでもない不調和音を大きな音で鳴らし始める。

このようになれば、保育者は、二つの方向にいる幼児をなんと

かしなければならぬし、ひとりの保育者では手のほどこしようもなくなってしまう。また、そのようすをみながら待っている幼児たちも、それぞれ保育者とのかわりをもとうとして動き始めて、保育室は騒然となってしまう。

そこで、保育者は遂に大きな声をだして、「みんな自分の場所に坐ってて」ということになるが、このような雰囲気になれば、保育はとてできそうにないということになる。

(3)

ここに示した事例の中には、いろいろな問題が含まれている。まず、第一に、このようなことがよくおこるのは、入園してから、すこし落ち着いて一学期の後半になってからである。つまり、幼児が、園になれはじめ、保育者や友だちに認めてもらいたいという要求が強くなってきたときにみられる場合が多い。だから、保育者はこのような幼児の発達のな面を考慮して、もう少しゆっくり見守ってあげることが必要であろう。

しかし、また一方では先輩の保育者の学級では、このような状態があまりみられないというようなことで、よけいにせりに近いものが生じたりして、保育者によっては、神経質になったり、自信をなくしてしまったりするようなことにもなりかねない。

いずれにしても、そのようなことが、学級の幼児たちに反映して、幼児たちを不安定にさせている場合もある。でも、それは自信過剰で、「自分は、幼児のためになんでもしてあげることのできる保育者である」となどと考えている保育者よりは、幼児にとつて幸せであり、幼児とのかわり合いや幼児の発達によって、やがてうまくいくことになる。

第二には、幼児にしてあげたいという保育者の感情のみが前面にでて、ひとりひとりの幼児のもっている要求を無視してしまつたということであろう。そのために、円の中央にでてきた幼児の行動のもっている意味が理解されず、保育者にとっては、保育を邪魔する幼児として受けとられたということであろう。だから、はじめのうちは、そのような行動を無視しようとしてうまくいかなかったし、つぎには、その行動を変更させようとしたが、幼児に受けとめられず、遂に、保育者の実力行使ということになったというのであろう。もし、保育者が幼児の側に立つて、その幼児の行動の意味について理解してあげたらもう少し行動も変わったであろう。

さらに、保育者は幼児の行動を変えたいために、「お部屋からでていってもらいます」という拒否的なことばを使ったということである。このことばは、幼児にとっては、自分の行動について

理解してもらえないばかりか、自分を信頼してくれないというところで、より保育者に反抗的な行動をとらせるということになる。ろう。

ここでもし、幼児が保育者のいうように、保育室からでていってしまったらどういうことになるだろうか。幼児との会話といえども心すべきことが保育者に多い。

私は、保育者に叱られて運動場へでていった幼児が、ションボリしているどころか、きわめて元気に遊んでいるのをみかけたこともある。

(4)

さて、これまで主として保育者が気にかかる幼児の行動についてみてきた。このような行動は、保育者は気にかかるから、なんとか処置をするからまだよいものの、それ以外に、保育者のみのがしている行動が実に多いということに留意しなければならない。

前述の例でも、特定の幼児以外は、表面だって保育者に訴えるような行動はしていないかも知れないが、特定の幼児以上に、保育者に訴えている幼児もいるはずである。このような行動の意味を理解することはきわめて困難であることはいうまでもないが、やはり保育者は、このようなひとりひとりの幼児の行動の意味に

ついて十分に理解してあげる必要がある。

また、前述の特定の幼児の場合でも、保育者が、一日の保育の流れの中で、またこれまでの保育の中で、その幼児の行動の意味を理解して受容してあげたら、ここに記した行動はみられなかったかもしれないのである。

それは、入園当初、目立った行動が多くて手こずった幼児には、保育者がいるいろいろな面で行動を理解しようとしたため、ある時期に、きわめて安定した幼児になったりする例がきわめて多いことからもうかがわれる。また逆に、入園当初目立った幼児に手をうばわれて、あまり目立たない幼児に気をくばることが少なくなり、目立った幼児たちが安定したあとで、これまで目立たなかった幼児たちが、目立ってくるという経験をもっている保育者も多いことであろう。

いずれにしても、ひとりひとりの幼児は、ひとつひとつの行動の意味を保育者に理解してほしがついているのである。

ここでは、保育経験の浅い保育者の例をあげたが、これは決して、浅い保育経験者だけの問題とはいえないであろう。

(暁学園短期大学)